A. KOBAYASHI: A Study on the Relationship between
Personality Traits and Preference of Sport.

スポーツ種目の好みとパーソナリティ
特性についての研究

九州大学 小 林 篤

I 問 題

種目別のスポーツマンのパーソナリティ特性については既に若干の研究がなされており、それらの多くは種目によつてパーソナリティ特性には差が存することを明らかにしている²⁾³⁾。しかし、その差がスポーツ経験の内容の差によつて生じたものであるか否かを明らかにした研究は存在しない。

この問題についてはスポーツ種目の好みとパーソナリティ特性の関係を分析したフラナガンの業績が示唆に富んでいる¹⁾。彼は種目の完全な自由選択を認めている大学の体育実技の場を利用して、パーソナリティがスポーツ種目の選択(好み)を決定する一因子であることを見出した。しかし彼が問題としたスポーツ種目は、わが国ではポピュラーでないものが多く、またこれらの種目に対する準拠枠が米国と日本では異なるかも知れない。そこで本研究の前段では、一般学生を対象としてスポーツ種目の好みとパーソナリティ特性の関係を分析し、後段においてこの結果をスポーツマンへの道を歩み始めた学生のパーソナリティ特性と比較することによつて、種目別のスポーツマンのパーソナリティ特性の差はスポーツ経験の内容の差によつて生ずるものであるか否かを明らかにしようと試みる。

II 方 法

対象は昭和35年度入学の九州大学男子学生。種目の自由選択を原則とする体育実技の

場を利用し、1期(1年生の4~9月)、2期(同10月~2月)の選択種目を問題とする。1期の種目は軟式野球(記号B)、ソフトボール(S)、軟式庭球(T)、バドミントン(D)、卓球(P)、排球。2期は籠球(B'), 蹴球(S'), ホッケー(H)、卓球(P)である。但し排球のみは選択者が少ないために第2志望の学生を若干編入しているので分析から除外する。尚、バイアスを避けるために次の学生は分析から除外した。

1) 身体的疾患のために自己の好みとは無関係に選択種目が限定された者(16名)。

2) 九大入学前に上記8種目のいずれかを運動部活動として少なくとも2年間継続して行なつており、且つその種目を体育実技で選択した者(25名)。

3) 前段では、上記8種目のいずれかの運動部に所属している者(126名)。

パーソナリティの測定には矢田部 ギルフオド性格検査(YGテスト)を用いた。テストは昭和35年4月中旬、即ち被験者が入学した直後に実施した。体育実技における1期の種目選択はそれより1週間後、2期の種目選択はそれより6カ月後に行なつている。

III 結 果

A. 種目の好みとパーソナリティ特性の
関係

Aa. テスト項目を中心とした分析

各テスト項目の集団別の平均値と標準偏差

表1 選択種目による集団別の結果

種目	人数	Co	Ag	O	N	I	A	G	R	C	D	T	S
BB'	44	5.8 3.36	10.0 3.51	6.6 3.67	7.7 4.75	7.8 4.79	11.3 4.66	12.1 4.52	11.1 4.34	8.6 4.04	7.4 5.09	9.9 4.26	9.9 6.75
BS'	51	7.0 4.03	9.8 3.35	7.4 4.31	8.3 5.02	7.8 5.03	11.8 4.39	10.4 3.77	9.7 4.10	9.6 4.91	9.3 5.59	11.1 4.41	10.2 5.68
BH	27	7.0 2.35	9.0 3.85	6.0 3.18	8.1 5.42	9.9 4.22	13.6 4.80	10.1 2.83	9.0 3.68	8.6 4.46	8.6 5.0	9.6 4.74	11.7 4.87
BP	25	7.3 2.72	9.7 3.19	6.4 3.52	8.3 4.57	9.0 4.91	12.8 4.82	11.2 3.13	8.4 3.99	9.6 5.10	9.1 3.96	12.4 3.37	16.0 5.23
SB'	38	7.7 3.67	9.5 3.83	6.9 3.31	9.1 4.11	8.4 4.17	12.4 4.91	11.7 4.75	8.4 4.17	9.3 4.14	8.6 5.04	11.2 3.42	10.6 4.76
SS'	56	7.2 2.61	10.2 3.59	7.2 3.43	9.5 4.60	8.9 4.63	12.5 4.72	10.3 4.46	9.0 4.86	10.7 4.30	9.8 5.10	11.4 3.80	10.5 5.26
SH	24	7.0 4.11	10.5 4.47	7.5 4.24	10.3 5.86	10.9 4.81	13.8 4.24	9.9 4.15	8.1 3.54	9.9 4.77	11.0 5.49	11.8 4.80	12.5 4.27
SP	35	7.7 3.73	8.8 3.68	6.9 3.79	10.6 5.49	10.4 4.85	14.8 2.83	9.8 4.10	7.8 3.76	10.0 5.14	10.4 5.91	11.6 3.99	12.5 4.38
TB'	69	7.1 4.06	9.0 3.74	7.7 4.43	8.9 5.46	9.5 5.11	12.0 4.65	11.5 4.64	9.4 4.23	10.2 5.22	9.4 5.92	11.3 4.12	10.1 5.22
TS'	71	7.5 3.42	9.8 3.65	7.4 3.64	10.0 4.62	9.7 5.10	12.3 5.35	11.0 5.36	8.4 4.43	10.3 4.76	10.1 5.19	12.2 4.12	11.1 5.39
TH	59	6.4 5.69	10.1 3.28	6.2 3.53	8.4 4.91	8.2 5.19	11.7 4.49	11.4 4.05	9.9 4.26	9.5 4.46	8.5 4.75	10.5 4.42	9.5 4.28
TP	90	8.0 4.09	9.5 4.28	7.8 3.77	10.6 4.85	9.7 4.91	11.9 5.05	10.6 4.18	9.0 5.25	10.0 4.79	10.1 5.10	12.0 4.31	10.4 5.20
DB'	21	7.1 3.21	8.5 3.14	7.5 4.54	10.0 4.85	9.0 5.18	13.1 3.88	10.3 3.38	8.3 4.09	8.8 5.03	9.6 5.98	11.7 2.93	10.9 4.57
DS'	31	7.7 4.15	10.8 4.66	7.3 3.73	10.7 6.04	10.5 5.61	12.5 5.99	9.9 4.87	8.6 6.17	9.9 9.40	10.3 5.51	11.4 4.92	10.7 6.03
DH	25	7.3 3.26	9.2 3.18	7.3 2.74	10.2 3.99	10.3 4.53	13.4 5.11	9.5 4.17	7.8 3.02	9.8 4.06	9.4 4.62	11.0 3.69	12.4 4.27
DP	26	7.7 3.72	9.2 4.05	8.9 3.74	11.7 4.08	10.9 4.61	13.7 4.72	9.8 5.21	9.8 3.31	11.2 4.35	10.6 4.71	12.6 3.43	11.9 4.93
PB'	16	7.9 3.63	9.2 3.40	8.4 4.04	9.6 4.79	7.2 4.05	11.3 4.71	11.8 4.74	8.9 2.99	10.4 3.33	11.4 5.19	13.1 2.81	9.3 4.78
PS'	14	9.1 4.62	10.1 4.96	8.6 4.10	11.9 6.33	12.5 6.43	14.4 5.11	7.4 4.82	7.7 3.95	11.9 4.68	12.3 5.95	11.7 3.17	13.4 5.81
PH	20	7.3 3.36	10.5 4.19	7.6 3.72	10.8 4.24	10.7 4.88	13.3 5.70	11.3 4.14	9.6 4.35	10.7 3.68	9.3 4.69	12.6 3.76	10.3 5.52
数値は	小さいほど	協調性	攻撃的	客観的	神経質	劣等感	支配性	活動的	のどけい	気分化の	抑うつ	外向的	社会的

表 2 簡 略 化 し た 結 果

D	B'	S'	H	P	C	B'	S'	H	P
B	◎	○	◎	○	B	◎	○	◎	○
S	◎	△	△	△	S	◎	×	○	○
T	○	△	◎	△	T	○	△	○	○
D	○	△	○	△	D	◎	○	○	※
P	△	×	○		P	△	※	×	
I	B'	S'	H	P	N	B'	S'	H	P
B	◎	●	△	○	B	◎	◎	◎	◎
S	○	○	※	※	S	○	△	×	※
T	○	○	◎	○	T	○	×	○	×
D	○	※	※	※	D	×	※	×	※
P	◎	※	※		P	△	※	※	
Co	B'	S'	H	P	O	B'	S'	H	P
B	◎	◎	◎	△	B	○	◎	◎	◎
S	×	△	◎	×	S	○	○	○	○
T	○	×	◎	×	T	○	○	◎	△
D	○	×	△	×	D	○	○	○	×
P	×	×	△		P	△	×	○	
G	B'	S'	H	P	R	B'	S'	H	P
G	◎	○	△	○	B	◎	○	△	△
S	◎	△	△	×	S	△	△	△	×
T	○	○	○	○	T	△	△	◎	△
D	△	×	×	×	D	△	△	×	◎
P	●	※	○		P	△	×	○	
T	B'	S'	H	P	A	B'	S'	H	P
B	◎	○	◎	△	B	◎	◎	×	○
S	○	○	○	○	S	○	○	×	※
T	○	△	◎	△	T	○	○	◎	○
D	○	○	○	×	D	△	○	△	×
P	×	○	×		P	◎	×	△	
S	B'	S'	H	P					
B	○	○	○	○					
S	○	○	※	※					
T	○	○	◎	○					
D	○	○	×	○					
P	◎	※	○						

は表 1 の如くである。例えば BB' とは 1 期に野球, 2 期に籠球を選択した集団。

さて, この結果を簡略化して表示すると表

2 のようになる。この表は次の手続きにより作成した。

1) 各項目とも平均値の大小により集団を順位づける。「望ましい」特性の高い集団が上位。例えば N では 1 位 BB', 2 位 BH, ... 19 位 PS' となる。1 位は◎, 2 位は●, 3 位は◎で表示。

2) 1 位の集団と他の集団との平均値の差の検定。例えば N では BB' と他の集団との差を順番に検定して行くと, 8 位の SS' との間に初めて有意差 (5 %水準) が出る。そこで有意差のない 7 位までの集団は○で表示。

3) 同様に 2 位の集団と他の集団との差の検定。例えば N では 2 位 BH とは 10 位の TS' との間に初めて有意差が出る。そこで 8 位から 9 位までの集団は△で表示。

4) 同様に 3 位の集団と他の集団との差の検定。N では 3 位と 15 位との間に初めて有意差がみられる。そこで 10 位から 14 位までは×で表示。

5) それ以下の順位の集団は※で表示。

尚, Ag は殆んど差がないので除外してある。さて, この表にもとづいて考察を進めよう。

D (抑うつ性) …概して 1 期では野球を選択する集団, 2 期では籠球・ホッケーを選択する集団の D が他の種目を選択する集団のそれよりも小さい傾向があり, とりわけ D の小さいのは野球・籠球をクロス選択する集団 (BB') である。

C (気分の変化) …概して 1 期では野球を選択する集団, 2 期では籠球を選択する集団の C が他の種目を選択する集団のそれよりも小さい傾向があり, とりわけ C の小さいのは野球・籠球をクロス選択する集団である。またバドミントンを選んだ者のうち最も C の大きい者が 2 期には卓球を選び, 1 期に卓球を選んだ者のうち比較的 C の小さい者が 2 期には籠球を選んでいる。

I (劣等感)…概して1期では野球・庭球を選択する集団, 2期では籠球を選択する集団のIが他の種目を選択する集団のそれよりも小さい。また1期でバドミントンや卓球を選んだ者のうち最もIの小さい者が2期には籠球を選んでいる。

N (神経質傾向)…野球を選択する集団のNが他の種目を選択する集団のそれよりも顕著に小さい。籠球の優位は顕著でないが、しかし最もNが小さいのはやはり野球・籠球をクロス選択する集団である。これに反してバドミントンや卓球を選択した集団のNは大きく(BPのみ例外), BPを除く各集団は1期に野球を選択した集団のいずれかと有意な差が存在する。

以上の4項目は情緒的安定性に関するものであるが、これを総合すれば野球や籠球を選択する者は他の種目を選択する者より情緒的に安定しており、とりわけ野球と籠球を共に選択する者が最も安定しているといえる。

Co (協調性)…1期では野球を選択する集団, 2期ではホッケーを選択する集団のCoが最も高い。籠球の優位は顕著でないが、しかしCoが最も高いのはやはり野球・籠球をクロス選択する集団である。また1期に野球を選択した者の中でも比較的Coの低い者は2期には卓球を選択しており、概して1, 2期とも卓球選択者はCoが低い。

O (客観性)…顕著な差異はないが、卓球を選択する集団のOがやや劣る。

以上の2項目とAg (顕著な差なし)は社会的適応性に関するものであるが、総合すれば卓球選択者は社会的適応性がやや劣るといえる。

G (活動性)…概して籠球を選択する集団が最も活動的であるが、その中でもとりわけ活動的な者は1期に野球を選んでおり、比較的活動的でない者がバドミントンを選んでいる。しかし相対的にみれば籠球を選ぶ者はバドミ

ントン選択者の中では最もGが高い。1期に卓球を選択した集団でも同様である。

R (のんきさ)…野球・籠球をクロス選択する集団が顕著にのんきであり、この集団と有意な差を示さないのは4集団にすぎない。

以上の2項目は衝動性に関するものであるが、総合すれば野球・籠球をクロス選択する者が最も衝動的であるということになる。

T (思考的向性)…1期に野球を選択した者のうち、やや内向的な者が2期には卓球を選んでいる。また2期に籠球やホッケーを選択した集団の中で最も内向的なのは1期に卓球を選択した者である。

A (支配性)…概して籠球を選択する集団のAが最も高いが、その中で比較的Aの低いのは1期にバドミントンを選択した者である。

S (社会的向性)…概して1期では野球や庭球を選択する集団, 2期では籠球を選択する集団に最も外向的な傾向がみられる。

Ab. 個人を中心とした分析

YGの各項目とも標準点3の中点を切半点として+, -に切半する。例えばCoでは標準点3は粗点7~10であるので、粗点0~8を+, 9~20を-とする。+としたのは「望ましい」特性, 即ち次の方向の諸特性である。協調的, 攻撃的でない, 客観的, 神経質でない, 劣等感小, 支配的, 活動的, のんき, 気分の変化小, 抑うつ性小, 思考的外向, 社会的外向。そして+の数が9以上の者を「上」, 8~4の者を「中」, 3以下のものを「下」としてこれを集団別にまとめると図1のようになる。この図では、分布の型の類似度によつて集団を分類してあるが、野球と籠球をクロス選択する集団(BB')がすぐれて調和のとれたパーソナリティを有している者が多く, BPを除くレベルIV以下の集団はすべてこの集団の分布型と有意な差(5%水準)を示している。総じてこの図にみられる結果は、項目別の分析の結果と一致している。即ち、(1)野球や

図1 選択種目による集団別の結果

籠球を選択した集団が概して上位にある。(2) 野球選択者の中では、これと卓球をクロスして選択した集団 (BP) が最も下位にあるが、それでさえも「下」に属する者は12%にすぎ

ない。(3) これに反して卓球やバドミントンを選択した集団は概して下位にある。但し野球や籠球をこれとクロスして選択した集団は例外である。

B. 運動部入部者との比較

さて、以上の結果をスポーツマンへの道を歩み始めた学生の集団の結果と比較しよう。

「スポーツマンへの道を歩み始めた学生」はここでは次のように定義する。即ち、35年度入学生で運動部に入部した者のうち、中学や高校でその種目の運動部に所属したことの無い者。つまり九大に入学する迄は所謂一般学生であつた者。

Ba. テスト項目を中心とした分析

結果は表3の如くである。尚、蹴球部とホッケー部は当該学生がいずれも僅か3名であるので除外した。

野球部員はバドミントン部員よりも有意(5%水準)に神経質でなく、劣等感小さく、支配性大きく、また卓球部員よりも劣等感小さく、支配性大きく、庭球部員よりもものんきである。また籠球部員はバドミントン部員よりも神経質でなく、庭球部員は卓球部員よりも支配性が高い。

もつと標本が大きくなれば野球・籠球部員と卓球・バドミントン部員との間には確実な有意差が出るものと予想され、これらの集団

表3 スポーツマンへの道を歩み始めた学生の結果

運 動 部	人数	Co	Ag	O	N	I	A	G	R	C	D	T	S
硬式野球部	14	7.4	9.7	7.2	8.4	6.7	9.1	10.9	12.3	8.3	8.8	10.0	9.0
軟式野球部		3.61	4.66	3.15	4.18	3.49	4.99	3.13	3.11	3.49	3.90	2.80	4.47
籠球部	8	9.9 5.41	10.3 2.43	6.0 2.45	8.6 4.87	9.0 4.58	9.3 3.45	13.4 3.04	10.9 3.95	10.0 3.43	10.9 5.86	11.0 5.39	8.1 4.22
軟式庭球部	45	7.1	10.5	7.5	9.7	8.9	10.8	12.0	9.2	9.7	9.0	11.2	10.3
硬式庭球部		3.64	4.06	4.12	4.98	4.13	3.69	4.64	5.15	3.96	5.13	4.17	4.64
バドミントン部	11	7.6 2.71	8.8 4.13	8.5 4.21	12.0 3.93	10.5 5.19	13.5 6.13	9.8 5.06	9.4 4.31	9.4 4.35	9.4 4.60	11.2 4.89	12.1 6.27
卓球部	42	7.6 3.83	9.8 3.77	7.5 4.64	9.2 5.01	9.9 4.45	12.5 4.65	11.4 4.26	10.2 3.89	10.4 4.90	8.8 6.20	10.7 4.44	10.9 4.36

間には明らかにパーソナリティの差が存在するものと思われる。

しかしこの結果を表1の結果と比較してみるとどうであろうか。例えば野球部員の平均値が体育実技で野球を選択した集団の平均値のいずれかと少なくとも2以上の差がある項目を選び出すと表4のようになる。+は部員集団の方が平均値にして2以上すぐれるもの、-はその逆。

庭球部員と体育実技での庭球選択者との間には顕著な差はみられない。また、バドミントン部員とバドミントン選択者との間にも表にみる如く殆んど差がない。卓球では両群の差がやゝ出てくるが顕著ではない。しかし卓球部に入部する者は卓球を好む集団の中では最も思考的外向で、神経質傾向や抑うつ性が小さいようである。一方、野球や籠球では両群の差がかなり顕著である。野球部員のパー

表4 部員集団と種目選択集団の比較

野 球 部			
	+		-
I	BH, BP	BB', BS'	
A	BB', BS' BH, BP		
R	BS', BH BP	BB'	
T	BP	BB', BS' BH	
S	BH, BP	BB', BS'	
籠 球 部			
	+		-
Co			BB', SB' TB', DB' PB'
O	PB'	BB', SB' TB', DB'	
A	BB', SB' TB', DB' PB'		
G	DB'	BB', SB' TB', PB'	
R	SB', DB' PB'	BB', TB'	
D		TB', DB' PB'	BB', SB'
T		BB', SB' TB', DB'	PB'
S	SB', TB' DB'	BB', PB'	

バドミントン部			
	+		-
Ag	DS'	DB', DH DP	
N		DS', DH DP	DB'
卓 球 部			
	+		-
N	DP, PS'	BP, TP SP, PH PB'	
I	PS'	BP, TP SP, PH DP	PB'
A	SP	BP, TP PS, PH PB', DP	
G	PS'	BP, TP SP, PH PB', DP	
R	SP, PS'	BP, TP PB', PH DP	
D	PB', SP PS'	BP, TP DP, PH	
T	PB'	BP, TP PS', PH SP, DP	
S	PS'	BP, TP SP, PH PB', DP	

ソナリティは、一般学生の中で図抜けてすぐれたパーソナリティを示す BB' と類似しているが、多くの特性で更にこれを抜いている。とりわけ野球部員は顕著に支配性が大きく、また最も劣等感や気分の変化が小さく、のんきで、社会的外向である。籠球部員も体育実技で籠球を選択した集団よりも顕著に支配性が大きく、また最も活動的、のんき、社会的外向である。しかし野球部員、籠球部員とも協調性は意外に低く、とりわけ籠球部員は低い。

Bb. 個人を中心とした分析

Ab と同じ方法でまとめると図2のようになる。これを図1と比較してみると、野球部はレベルⅠ或はその上位、卓球部はレベルⅣ、庭球部とバドミントン部はレベルⅤに属する。籠球部は独得な分布の型を示しているが、これもレベルⅠ或はその上位とみなすのが妥当であろう。

図2 スポーツマンへの道を歩み始めた学生の結果

この結果は項目別の分析の結果を総合的に裏付けしている。即ち、(1) 野球部員は野球を好む集団の中でもすぐれて欠陥のないパーソナリティを有している。(2) 籠球部員についてもほぼ同様である。(3) この傾向はかなり稀薄にはなるが、卓球部員と卓球を好む集団との間でも同様である。(4) 一方、庭球部員が庭球を好む集団に、バドミントン部員がバドミントンを好む集団に比してすぐれているとはいえない。但しパーソナリティに多くの欠陥を有する者の比率は運動部集団の方が概して若干低い。

IV 結 論

スポーツ種目の好みとパーソナリティ特性の関係については、次のことが明らかになった。即ち、(1) 概して野球と籠球をクロス選択する者が最も望ましいパーソナリティを有しており、野球のみ或いは籠球のみを選択する者がこれに次いでいる。(2) これに反して卓球やバドミントンを選択する者のパーソナリティには問題が多い。(3) 野球や籠球を選択する者のうちパーソナリティに関して劣位にある者がもう1つの種目として卓球やバドミントンを選ぶ。また卓球やバドミントンを選択する者のうちパーソナリティに関して上位にある者がもう1つの種目として野球や籠球を選ぶ。(4) これら2つの型の中間に位置するのがソフトボール、庭球、蹴球、ホッケー等をクロス選択する者である。

このような優劣関係はスポーツマンへの道を歩み始めた学生の集団でも全く同様にみられる。即ち、パーソナリティに関して野球部員や籠球部員はバドミントン部員や卓球部員よりも優位にあり、庭球部員がその中間に位置している。つまり、種目間のスポーツマンのパーソナリティの差はスポーツマンへの道を歩み始める以前から存在している。

野球を好む者が野球部に入り、卓球を好む者が卓球部に入るのであるから、野球部員の母集団は野球を好む者の集団、卓球部の母集団は卓球を好む者の集団と考えるのは妥当なことであろう。そして今迄の分析で明らかな如く、これらの母集団は異なるのであるから、それぞれの母集団の中でスポーツマンへの道を歩み始めた者のパーソナリティが異なるのは当然のことであろう。

しかし仔細に検討してみると庭球部員＝庭球を好む者の集団、バドミントン部員＝バドミントンを好む者の集団であるが、野球部員と籠球部員はそれぞれの母集団の中の所謂エリートであり、卓球部員もやゝその傾向があ

る。この結果は、これらの運動部に入部する条件として学生が抱く準拠枠を明示するもので、野球部や籠球部への入部に踏切るにはすぐれて積極的なパーソナリティ、とりわけ支配性の大きいことが必要であると思われる。

参 考 文 献

- 1) **L. Flanagan** (1951): A Study of Some Personality Traits of Different Physical Activity Groups, *Research Quarterly*, **22**, 312~323.
- 2) **C.C. Cowell** (1960): The Contributions

of Physical Activity to Social Development, *Research Quarterly*, **31**, 286~306.

- 3) 末利博 (1960): 体育心理学 (下巻).
- 4) 木村昭光 (1957): **Personality** と運動選択についての一考察, *体育学研究*, 2巻7号, p. 68~9.
- 5) 花田敬一 (1960): 運動選手の性格特性についての一考察 (第2報), *体育学研究*, 5巻, 1号, p. 83.
- 6) 飯田顕男他 (1960): スポーツ適性に関する研究 (その3) 一人格特性について一, *体育学研究*, 5巻1号, p. 73.